

# 「んだよね」の 発話意図を解釈する 手がかりとは？

—発話意図と音調との対応関係に注目して

市村葉子

## ◆要旨

**説**明のモダリティ「ノダ」に「よね」が付加された「ノダよね」は、産出可能レベルと理解を要求されるレベルの差が大きいことや、「確認」「情報提示」という対照的な発話意図を担うことなどから、学習者にとって習得困難な形式であると考えられる。こうした現状を踏まえ、本稿は学習者が発話意図を適切に理解するための手がかりを探るため、「ノダよね」の具現化形式「んだよね」に注目して、発話意図と音調との対応関係を分析した。分析の結果、相手に対し積極的に肯定的反応を求める場合には上昇下降の「ね」が、相手に情報提示する場合には平坦、アクセント上昇の「ね」が選好されることが分かった。

## ◆キーワード

んだよね、発話意図、音調、長呼、自然会話コーパス

## ◆ABSTRACT

The Japanese compound form *nodayone*, which combines *noda* and *yone*, is a very difficult expression for Japanese learners, for the following reasons. (1) Only superior learners can use this form in conversation, although Japanese learners are required to understand its usage at the beginner level. (2) This form has two meanings, that is, confirmation and explanation. The aim of this paper is to sort out issues related to the meaning of *ndayone* and propose a teaching method for this form, on the basis of a conversational corpus and tone analysis. The results show that confirmatory uses of *ndayone* use rising-falling tones, while cases of explanation use accentual tones and flat tones.

## ◆KEY WORDS

*ndayone*, utterance meaning, lexical tones, elongation, conversational corpus

## What is the Clue to Interpret the Utterance Meaning of People Using *ndayone*?

Focusing on correspondence  
between of the utterance meaning and the lexical tones

YOKO ICHIMURA

## 1 はじめに

本稿の目的は、「ちょっと違うんだよね」の「んだよね」の発話意図と音調との関係を分析し、発話意図を解釈する手がかりを記述することである。

自然会話において、ノダ文は多様な形式で使用されるが、その中でも「よね」が後接した「ノダ+よね（以下、ノダよね）」の具現化形式「んだよね」「のよね」「んですよね」は、「確認要求」、「聞き手に欠けた情報を話し手が伝達する」と記述されるように、文脈によって対照的な発話意図を伝達する。

日本語教育における当該形式の位置づけをみると、「ノダよね」は産出レベルでは非常に難易度が高い一方で、自然会話においては初級修了レベルから理解が求められていることが示唆された。しかし、超級話者でしか使用が観察されないという当該形式の場合、「のだ」「よ」「ね」それぞれの意味を個別に指導しても、その使用的意味を適切に理解するのは困難であろう。その場合は、一つの形式として学習者に使用場面と手がかりを指導した方が、学習負担も軽減され、なおかつ実践的であると考え。そこで、本研究では当該形式の発話意図を理解する手がかりを探る。具体的には、「ノダよね」の具現化形式の中で特に使用頻度の高かった「んだよね」について、当該形式を使用する発話意図と音調との関係に注目し、分析を行った。

## 2 先行研究と日本語教育における「ノダよね」の位置づけ

### 2.1 先行研究

当該形式の発話意図に関する先行研究として蓮沼（1992）および野田（2002）を取り上げる。蓮沼（1992）によると、「よね」には「聞き手に欠けた情報を話し手が伝達する用法」がある。そしてこの場合「ね」の使用は任意あるが、使用することにより、「発話権の保持」や相手の発言に呼応して一体感を示すといった協応的態度を示すことができるという。さらに、この用法の形式的特徴として、「よね」が（1）のように「いわゆる説明のムードを表す「のだ」「わ

けだ」と共に使用される」（p.66）といった指摘もある。

- (1) 法子：彼がね、仕事で南米に行くことになって、彼としては一緒に来てくれるだろうと思っていたのよね。でも、桐子、その頃、仕事が面白くて仕方なかったの。それで、一緒に行くのいやだ行って行ったの。 （蓮沼1992:65（6）原文ママ 点線筆者）

野田（2002）では、「のだ」に「確認要求」の「よね」が接続した例として、次の例を挙げている。

- (2) 「結婚、しているんですよね？」  
突然彼女が僕にそう聞いた。どくんと心臓が嫌な音を打つ。  
「指輪」  
そう彼女は呟く。僕は黙ったまま、脂肪に埋もれた銀色の指輪に目を落とす。  
「右手にしているから、もしかしたら違うのかなって思ってたんです」  
（野田2002:287（85））

野田（2002:288）によると、この場合、聞き手が指輪をしているという状況の〈事情〉を「結婚している」と把握していることが「のだ」で、その把握が当然のことであるという見込みが「よ」で、その見込みと聞き手の知識の一致を問うことが「ね」で表されているという。

両者の記述をまとめると、「ノダよね」には話し手が相手（当該発話の聞き手）に「情報提示」する場合と、話し手が相手に知識の一致を求める（「確認・同意求め」）場合があるということになる。では、この一見相反する発話意図を、母語話者は何を手がかりに解釈するのであろうか。

### 2.2 日本語教育における「ノダよね」の位置づけ

次に、「ノダよね」を学習者の「産出」及び「理解」という観点から考える。山内（2004）はNグラム統計<sup>[註1]</sup>を用いて、中級、上級、超級の各レベルを特

徴づける文字列の抽出を行った。その結果をふまえ、山内(2004)は「超級話者の特徴は「んです」を「けど」「ね」「よ」「よね」などとうまく結びつけて使用できることだと言えるかもしれない」(p.156)と記述している。従って、「ノダよね」は「産出」レベルでは非常に難易度の高い形式であると言える。

一方、「ノダよね」の「理解」について記述している先行研究は管見の限りみられなかった。そこで、「理解」が求められる日本語レベルを探るため、新日本語能力試験模擬テストの聴解スクリプトを用いて当該形式の出現状況を調査した。その結果、N4以降では2.1で記述したいずれの「ノダよね」も観察された。以下、N4で観察されたそれぞれの用例を挙げる。

#### ①「確認・同意求め」の例

##### (3) 【課題理解問題】<sup>[注2]</sup>

M: 明日、おぼさんのうちに持って行くのって、この大きい箱でいいんだっけ?

F: うん、そう。白い方じゃなくて、黒い方ね。

M: わかった。あと、お皿とカップ、持って行くんだよね。

F: あ、おぼさんに聞いたら、お皿は要らないって言ってたからおいていく。

M: そうなんだ。じゃあ、これで用意できたね。

問題: 女の人は家から何を持って行きますか。(選択肢は絵で表示)

(『日本語能力試験予想問題集(改訂版)N4』2013:78 下線筆者)

#### ②「情報提示」の例

##### (4) 【ポイント理解問題】

F: 来週、引っ越しんだ。

M: え、どうして? まだ住んで1年ぐらいだよね。

F: うん。駅も近いし、部屋も広くていいんだけど、近所に意地悪なおぼさんが住んでるんだよね。

M: そうなんだ。

F: 何もしてないのに、家の前を通ると必ず文句を言ってくるんだよ。

もう怖くてさ。

問題: 女の人はどうして引っ越しをしますか。

〈選択肢〉 1. 駅が遠いから 2. 部屋が狭いから

3. 意地悪な人がいるから 4. 友達がないから

(『短期マスター日本語能力試験ドリルN4』2010:9 下線筆者)

いずれの例も、「(命題) んだよね」の発話が解答を得る鍵となっている。N4は旧日本語能力試験の3級レベル(日本語学習時間300時間程度)であり、初級修了レベルとされる。従って、「ノダよね」は初級修了程度で「理解」されるべき形式と考えられているようである。では、学習者にこの複雑な「ノダよね」を適切に解釈させるために、教師はどのような指導ができるのだろうか。

## 2.3 本研究の立場と考察対象

以上、2つの疑問点を挙げたが、本稿は「んだよね」が終助詞(聞き手目当てのモダリティ形式)を含むことから、その発話意図を理解する手がかりの一つが音調にあると考え、発話意図と音調との関係を分析する。なお、本稿は学習者に当該形式の発話意図を指導することを念頭に置くため、「んだよね」を一つの形式として分析することとし、当該形式が「んだ+よ+ね」なのか、「んだ+よね」なのかといった形式内部の意味については考察の対象外とする。

## 3 調査と結果

### 3.1 調査概要

目的: 「んだよね」の発話意図と音調との関係を探る

資料: 名大会話コーパス(2名~4名の話者による約100時間の雑談データ)

手順: 1. 「ノダよね」の具現化形式を抽出する。

2. 先行研究に基づき、「んだよね」の発話意図を類型化する。

3. 各発話意図が含まれた会話文を作成し、読み上げ実験を行う。

4. 発話意図と音調との関係を分析する。

話し言葉（自然会話）コーパスは幅広い年齢層、関係を網羅したものが現時点ではない。本調査で使用した名大会話コーパスも参加者の8割は女性であり、会話の形態も親しい者同士の雑談に偏っている。従って、本研究は「んだよね」の発話意図に関するケーススタディとして位置づける。

## 3.2 調査結果

### 3.2.1 「ノダよね」の具現化形式

まず、本コーパスにおいて観察された「ノダよね」を抽出した。結果、「んだよね」「のよね」「んですよね」（それぞれ「よねえ」「よねー」といった「ね」が長く伸びる（以下、長呼）具現化形式を含む）の3形式が使用されていた。

表1 「ノダよね」の具現化形式の出現数 ※（ ）内は参加者人数を示す

	総数	対象数	10, 20代 (104)	30, 40代 (50)	50, 60代 (37)	70代以降 (6)	不明 (1)
んだよね	830	804	559	202	38	4	1
のよね	177	167	31	24	88	24	0
んですよね	314	304	82	114	107	0	1
計	1321	1275	672	340	233	28	2

文字化が不完全な発話、「って」のような引用表現が付加された発話、同一話者の繰返し発話は対象外とした。結果、1275発話（96.5%）が対象となったが、本コーパスにおいては本稿で分析対象とした「んだよね」が全体の63.1%を占めていた。同じ常体の具現化形式である「のよね」と出現数に差があるかを $\chi^2$ 検定を用いて調査した結果、有意な差が見られ（ $\chi^2(3) = 403.1, p < .01$ ）、40代以下では「んだよね」、50代以降では「のよね」の使用数が多い傾向にあった。さらに、男性の使用に注目すると、「のよね」は4例（20代、60代各1例、40代2例）のみであったのに対し、「んだよね」は97例観察された。

### 3.2.2 「んだよね」の発話意図

次に、「んだよね」の発話意図を用例とともに示す。先行研究で記述される「確認・同意求め」「情報提示」以外に、「同意」の用例も観察された。「情報提

示」については、蓮沼（1992）がいう「発話権保持」のほか、本調査では「相手の質問に対する応答」場面での使用が観察された。

#### (i) 確認

(5) (F049が学生のころ通っていた地域の英語教室がとても楽しかったが、気がついたら行かなくなっていたと話した後の会話)

F120：あ、院に行ってるときか。

F049：、あ、だからできたんだね。

F120：あー、そうだよー。

F049：で、事務所入って一、（うん）全然平日で行けなくなっちゃったんだ。

F120：あー、そっかー。（うん）じゃ、院に行ってるころはさ、（うん）もうちょっとは楽だったんだよねー。

F049：あー、楽だった。 (data053)

#### (ii) 同意求め

(6) (二人が非常勤として勤務する大学の、ある専任教員についての会話)

F131：でも、いろんなところで見かけるよ、あの人。（<笑い>）絶対、行けば一回は見るもん。

F051：いるよね。あの、LLのあたりの廊下ですごい見かける。

F131：絶対見るよ、あの人。

F051：うん。で、9号館の、その講師室にも来るんだよね。

F131：来る、来る。 (data117)

#### (iii) 同意

(7) (日本語の授業中に英語を聞いたがる学生についての会話)

F004：そう、（うん）言ってもだめでしょう。（うん、うんうん）あれがよくわかんないんだけど、私。

F005：なんかちょっとね、（うん、うん）授業を投げてるみたいなのが（うん、うん）あるよね。

F004: そうそうそうそう。そうなんだよね。うん、なんなんだろうね。  
 そう、目標が高くないんだろうか、なんなんだろうか。(data052)

(iv) 情報提示 (発話権保持を (8)、応答を (9) に示す)

(8) (M014がスープカレーを食べに行ったと話した後の会話)

F047: スープカレー、最近はやりなんだねー。

M014: そうそうそう。(うん) それでね、なんかー、土曜日にー、(うん) なんか俺、図書館にいてー、(うん) なんか、なんだっけ、なんか知らないけどHとIさんと会ってー、(うん) 飯食いに行くかーっつって(うん) 初め中華行きたいって(うん) 行ったんだよね。(うん) で、十五条ぐらいに(うん) 最近できたなんか中華の店があったから(うん) 行ってみたんだけどー、3時ぐらに行っただからちょうどさー、昼の部と夜の部の間でー、(あー、休憩時間みたいな) 終わってたのね。で、隣、隣がなんかスープカレーのさ、心っていう店があっつー。

F105: あっ、そこうまいらしいー。(data121)

(9) (F086が恋人について話した後の会話)

F046: 相手はどこ出身の人、(あっ、あれだよ) どの、独り暮らし?

F086: ううん、違う。元から東京の人で、(あ) なんか、八王子なんだよねー。

F046: あっ、結構遠いんだね。(data072)

3.2.3 発話意図と音調との関係

以上、4つ(下位分類を含めると5つ)のタイプの「んだよね」が観察された。次に、各発話意図と音調「ね」との関係性を調査した。ただし、名大会話コーパスは文字化資料のみであるため、本調査では当該コーパスで観察された用例を一部修正した会話文を用いて読み上げ実験を行った(会話文は付録を参照されたい)。調査協力者は母語話者15名(東京、神奈川、名古屋出身の20~50代の女性13名、男性2名)であった。

「ね」の音調は郡(2003)、轟木(2008)を参考に「疑問上昇」「アクセント上昇」

「上昇下降」「平坦」「下降」に分類した。終助詞の音調は前接の語の最終拍に対する接続の仕方(「順接」もしくは「低接」と、終助詞自体の拍内音調の組み合わせにおいて決定されるべきであるが、前接の語が有核の場合は「順接」と「低接」が中和される(郡2003)ため、「ね」の拍内音調を分析した。

「疑問上昇」とは、疑問文の文末に現れるような上昇音調、「アクセント上昇」はアクセントの低い拍から高い拍へ移行するときのような上昇音調、「上昇下降」は上昇した後下降する音調、「平坦」は聴覚的に上昇も下降もしない音調、「下降」は(顕著に)下降する音調をいう。轟木(2008)によると、「ね」は同じ上昇音調でも発話意図が異なり、疑問上昇は「確認要求」、アクセント上昇は平坦と同じ「話し手の判断の提示」を示すとされる。さらに、「ね」が長呼か非長呼かでも発話意図が異なると予想されるため、拍内音調5種の長呼及び非長呼の計10パターンを想定し、聴覚印象に基づき分類した。

読み上げは、まず調査協力者が会話文を黙読し、筆者と状況を確認した後読み上げる、という手順で行った。調査協力者には、会話文の中の表現が不自然だと思ふ箇所については適宜変更するように指示した。

「ね」の音調について、高さは筆者が聴覚印象で分類し、長さについては筆者の他2名の母語話者、計3名で判断した。「ね」の長さの判断については、判定協力者に「「ね」と書きたくなるか、「ねー」「ねえ」と書きたくなるか」を問うた。一致率は88.9%で、意見が分かれた場合には、多数決を採用した。

各発話意図と産出音調との関係を表2に示す。表2から下降は観察されず、疑問上昇は3回観察されたのみであった。また、各発話意図における産出音調をみてみると、(i)「確認」は主に上昇下降及びアクセント上昇、(iii)「同意」及び(iv)「情報提示」は平坦もしくはアクセント上昇が選好されることが分かった。(ii)「同意求め」はアクセント上昇、上昇下降、平坦が観察された。

表2 各発話意図と産出音調 ※ ( ) は長呼

	(i)	(ii)	(iii) [注3]	(iv) 保持	(iv) 応答
疑問上昇	1	0	0	2 (2)	0
アクセント上昇	4 (1)	7 (5)	8 (5)	5 (5)	6 (5)
上昇下降	10 (10)	5 (5)	0	0	0
平坦	0	3 (1)	5 (2)	7 (4)	9 (6)
下降	0	0	0	0	0

次に、「ね」の長さについてであるが、まず上昇下降はすべて長呼と判断され、アクセント上昇、平坦は概ね400msec以上を長呼と判断していた。実際に「ね」の持続時間を測定したところ<sup>[註4]</sup>、上昇下降で最も持続時間が短かった「ね」は305msecであった。一方、アクセント上昇及び平坦の「ね」については、判断が一致しなかったもの(8例)のうち、長呼と判断されたのはアクセント上昇が353msec、平坦が366msec以上であった。

## 4 考察

### 4.1 「んだよね」の使用

本研究では、「んだよね」の発話意図を解釈する手がかりを探ることを目的に当該形式を分析した。市村・堀江(2014)では話し言葉コーパス(親しい者同士及び初対面同士の雑談約16時間分)を用いて「ノダ形式」の使用実態を調査しており、その結果、「ノダよね」はスピーチレベル及び性別に関わらず、使用頻度の高い形式であると報告されている。そして、偏りのある資料ではあるが、本調査において、その「ノダよね」の具現化形式の中で「んだよね」は使用頻度も高く、性差なく使用される形式であるという結果になった。

次に、日本語教育の観点から「ノダよね」をみると、「産出」は超級話者にしか観察されない(山内2007)ものの、「理解」の面から見ると、N4レベルの聴解で解答に関わる重要な発話に使用されていることが分かった。このような「使えなくても理解する必要がある」(複合)形式の場合、個別の意味をそれぞれ指導するより、一つの形式と捉え、学習者に発話意図を適切に理解するための手がかりを与えたほうが効率的であると考えられる。

### 4.2 「んだよね」の発話意図と音調との関係

次に、「んだよね」の発話意図と音調との関係について考察する。先行研究の指摘通り、当該形式は対照的な二つの場面での使用が観察された。敷衍すると、相手に自身の持つ情報を確認する、もしくは同意を求める場合と、当該情報を保有していない(と考えられる)相手に情報を提示する場合である。そのほ

か、先行研究ではとり立てて記述されていないが、相手の意見に同意する場面でも使用が観察された。ただし、これは当該形式が「よね」を含むことから、「同意」は当該形式が有する用法であることが当然視されているためであろう。

発話意図と「ね」の音調との関係については、本調査の結果、「同意」「情報提示」と「確認」「同意求め」では異なる音調が使用される傾向にあった。具体的には、「同意」「情報提示」には、(聞き手が同意しているという前提で)話し手の判断の提示を表すアクセント上昇、及び平坦<sup>[註5]</sup>が選好されていたのに対し、「確認」には聞き手に同意を求める上昇下降(いずれも轟木2008)及び先述のアクセント上昇が、「同意求め」については、上昇下降、アクセント上昇、平坦が使用されていた。この「確認」及び「同意求め」の産出音調の違いは話し手の当該情報に対する確信度、もしくは聞き手への同意要求の度合いによると思われる。つまり、聞き手に対して積極的に同意を求めたい場合には「上昇下降」が、聞き手の同意が当然得られると考える場合には「アクセント上昇」及び「平坦」が使用されると考えられる<sup>[註6]</sup>。

一方、「ね」は二つの場面で長呼と判定される傾向にあった。一つは上昇下降の場合であるが、これは当該音調の性質上「ねえ」となるためと予測される。二つ目は「同意」「情報提示」場面であった。松崎・河野(1998)では、(10)の例を挙げ、「文末の最後の1拍をアクセントの上がり目のように上げて伸ばすと、独り言をしみじみと言っている感じになる」(p.116)と記述している。

(10) やっぱり、帰っちゃったか。

(松崎・河野1998:117)

この論を援用すると、当該形式が「同意」、または「情報提示」する場面で長呼されやすいのは、「当該情報を話し手自身で処理中である」という心的態度を明示するためであると考えられる。そして、当該形式に関しては、「ね」が平坦・長呼される場合にも同様の心的態度が表明されるのではないかと推察される。

また、庵他(2001)では自然下降調の「よね」が話し手の意見などを述べる際に使われることがあり、(11)のように聞き手に対する非難を表す場合があることを指摘している。

(11) A : ごめん。待った？

B : 1時間立ってるのは結構疲れるんだ {よね/?ね}。→

(庵他 2001: 276 (6))

庵他 (2001) のこの記述は、今までの先行研究では記述されていない「んだよね」の使用場面を指摘した重要なものだが、当該発話は、直接聞き手を非難するというより、「当該発話によって私が言いたいこと (当該場面では聞き手に対する非難) を理解してほしい」といった語用論的解釈を期待するものと考えられる。そして、ここでいう「自然下降調」が本稿の「意図的に上昇も下降もしない平坦調」と同義であるとするれば、独話的な態度を示す平坦 (長呼) はアクセント上昇と同様に、相手に対する非難や非選好的応答、または (8) のように過去の出来事を回想しながら語る場面で使用されやすいものと思われる。

本稿は「んだよね」の発話意図と音調との対応関係を記述した。提示した用法の一つである「情報提示」以外の用法は非ノダ文で使用される「よね」についてもあることから、それらの用法には同様の音調が使用される可能性がある。「んだよね」と非ノダ文で使用される「よね」の発話意図と音調との対応関係の差異については稿を改めて考察したい。

## 5 結論

本稿はコーパス調査及び母語話者の読み上げ実験により、ケーススタディとして「んだよね」の発話意図と「ね」の音調との関係について記述した。具体的には「上昇下降」の「ね」を伴った場合には命題の真偽について判断を求め、「アクセント上昇」「平坦」の場合には、話し手自身の判断の提示、さらに「ね」が長呼された場合には話し手が当該命題について自身で確認 (回想) 中であることを相手 (聞き手) に明示する、という傾向があると結論づけた。

当該形式は「ノダ」と終助詞が共起しているため、その意味はまだ解明されていない部分が多い。しかし、本調査により当該形式は使用頻度が高く、付加された情報が会話の重要な鍵になっていることが示唆された。当該形式の用法及び音調の明示的な指導は、学習者が母語話者の発話意図を適切に理解するた

めの一助となると思われる。

〈名古屋大学大学院生〉

付録：読み上げ実験に使用した会話文 (紙幅の関係により一部省略)

※B (ゴシック体) の読み上げを被調査者に依頼した。

### (i) 確認

(一時帰国している韓国在住のAが韓国のドラマについて話した後の場面)

B : どう? 韓国の芸能界について詳しくなった?

A : 全然。

B : 全然。

A : うん。テレビ見ないしねー。

B : んー、テレビ、は、あるんだよね。

A : テレビあるよ。(うん) うん。

### (ii) 同意求め

(Bが同棲してから結婚したいと話した後)

A : でも、ただら行きそうじゃない、同棲してたら。結構なんか。

B : あー。

A : 結婚もせず、籍も入れず、もうこのままでいいじゃん、めんどくさいみたいなさ。

B : まあ、それもあるけど、やっぱ結婚って一緒にいたいからするんだよね。

A : うん。

B : ってことはさ、同棲ができれば結婚してもうまくいってことじゃない。

### (iii) 同意

(AとBがパーティの日程を相談している場面)

A : 11月の初めぐらいでどうだって言ってんだけど。でも3、4ってさあ、

連休じゃない？

B：そうそう。3、4は連休なんだよね。

A：だからどっか行く予定とかがだれかあるんじゃないの。私はいいんだけど。

B：11ならいいんだけど、どうかなあ。

A：11。11だったらねえ、私はまだ何も予定はない。

#### (iv) ① 発話権保持

(Aが子育ては大変だと言ったのに対し、Bが姉の子どもと公園へ行って大変だったという話をしている場面)

A：うーん。疲れるのは子どもに付き合うことだよ、やっぱり。

B：うーん、そうだねえー。疲れるよねー、ほんとに。私(俺)なんかさー、ほんのちょっとしか見てないのにさー、えらい疲れちゃった。(うん) そう、お姉ちゃんの子どもと公園に行った帰りなんか、まず公園の行きでさ、結構歩くじゃん。(うん) で、公園の中で、やたら飛んだり跳ねたりするからさ、疲れるじゃん。もう、帰りはくたくたなんだよね、(うん) おなかもすいてるし。で、もう、ぐずってぐずってさー、ちょっとしたことで泣いちゃうんだよね。(うーん) で、もう泣き出したら、止まらなくて。で、姉と私でさ、交互に、すごいおどけてみせて、〈笑い〉あやして。なんとかなだめて。

A：自分で歩いて帰った？

B：うん、(ふーん) 最後まで歩いて帰った。

#### (iv) ② 応答

(AがBに大学へ行くのに何時のバスに乗るかを聞いている場面)

A：10時からだから、何時のん乗る？

B：うーんとねー。

A：8時17分のバスに乗っていけばいいよね。

B：うーん、それだと多分ちょっと早いんだよね。

A：でも9時では遅いでしょう。遅いもん。10時からでしょう。

#### 注

[注1] …… 山内 (2004: 151) によると、Nグラム統計は「テキストデータの中の、任意の長さの文字列の出現頻度を知ることができる手法」である。

[注2] …… 「課題理解問題」とは、「具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できるかを問う」問題であり、「ポイント理解問題」とは「事前に示されている聞くべきことを踏まえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う」問題である (国際交流基金2012: 83)。

[注3] …… (iii)「同意」(iv)「情報提示(保持)」の合計が15に満たないのは、被調査者が非ノダ文の「だよね」と発話したためである。

[注4] …… 持続時間の測定はPraat5.3のSoundEditorを使用し、広帯域サウンドスペクトログラム及び音声波形に基づいて行った。

[注5] …… 轟木 (2008) には「有核の語につくときはアクセント上昇のみで、低い拍のときは、同じ機能が対応する音調としては平坦は用いられない」(p.22) とある。今回「ね」が後接する「んだよ」は無核ではないため、当該形式については「ね」の平坦も存在し、その機能はアクセント上昇と同義であると推察される。アクセント上昇と平坦との発話意図の違いについては今後の課題としたい。

[注6] …… 査読の先生より、本結果は選択した会話文に依存している可能性があるとのこと指摘をいただいた。調査人数も含め、本調査は一般化するには材料が不十分であることは否めない。今後さらに材料を増やし、結果の妥当性を検証したい。

#### 参考文献

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

市村葉子・堀江薫 (2014) 「のだ文」を用いた日本語母語話者の伝達方略一話し言葉コーパスの分析に基づいて『第16回大会発表論文集』9, pp.1-8. 日本語用論学会

郡史郎 (2003) 「イントネーション」上野善道 (編) 『朝倉日本語講座3 音声・音韻』pp.109-131. 朝倉書店

轟木靖子 (2008) 「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察」『音声言語VI』pp.5-28. 近畿音声言語研究会

野田春美 (2002) 「第8章 終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ (新日本語文法選書4)』pp.261-288. くろしお出版

蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」筑波大学つくば言語文化フォーラム (編) 『対象研究 第二号 発話マーカーについて』pp.63-77.

松崎寛・河野俊之 (1998) 『日本語教師・分野別マスターシリーズ よくわかる音声』アルク

山内博之 (2004) 「語彙習得研究の方法—茶釜とNグラム統計」『第二言語としての日本語の習得研究』7, pp.141-161. 第二言語習得研究会



## 資料

『短期マスター日本語能力試験ドリルN4』 凡人社、2010

『日本語能力試験 公式問題集 N4』 独立行政法人国際交流基金、2012

『日本語能力試験予想問題集N4（改訂版）』 国書日本語学校、2013

名大会話コーパス 科学研究費基盤研究（B）（2）「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（平成13年度～15年度、研究代表者：大曾美恵子）の一環として作成